

## オーストリア林業フォーラム

基調講演

「オーストリアの林業と地方創生」

在オーストリア日本国大使館 特命全権大使 竹歳 誠氏

ご紹介いただきました、オーストリアの大使をやっております竹歳と申します。今ご紹介にありましたとおり、私の本職は国土交通省で、40年近く国内の仕事をやってきましたので、「なんで大使なんかやっているのだ」ということを時々言われます。「大体英語はしゃべれるのですか」と遠慮のない人は言われるわけですが、昨日も太田国土交通大臣に10何人かの大使が招かれまして、東ヨーロッパ、ロシア、中央アジアにおけるインフラ整備のお話をしたわけです。会議が終わって大臣室に参りましたら、「君は大体英語はぺらぺらか」とおっしゃるので、「ぺら、くらいはやります」とお答えいたしました。さっき吉田町長から「なんでもにっこり笑って引き受けてくれる」というお話でしたけれども、ついうっかり森下さん（鳥取県林業協会会長、元鳥取県中部森林組合代表理事組合長）に「林業の話をしますから」と約束したのが大変なことになりまして、まったく専門外なのにこういう立派な題で話をするはめになりました。ということで、まずはオーストリアというのはどういうところかというそのあたりから、話をさせていただきたいと思います。

ウィーンの街というのは、行かれた方もいらっしゃると思いますし、色々ご存知の方もいらっしゃると思いますけれども、その中心部というのは街並みがそろっておりまして世界遺産に指定されています。非常に外観は美しいのですが、実は石造りのように見えてレンガを積んだその上を漆喰とかで左官屋さんがつくった街です。

それから例えば立派な教会の中に入っていくと大理石の柱がありますが、それを撫ぜてみると実はそれは大理石ではないのですね。芸術家のようなペンキ屋さんが大理石の模様を描くわけです。これがまた見事で見ただけでは大理石かと思うのですが、予算をケチってそういうことをしているのかと思ったら、その逆でそういう人手のかかる仕事というのは余計に予算がかかるようです。いずれにしましても、この世界遺産である古い街並みを保存していくとなりますと、この左官屋さんとペンキ屋さんというのは永久に仕事が続く結構大事な仕事になっているわけです。

では一步街を出るとどうかと申しますと、これがなんと日本とあまり変わらない。今も鳥取空港から車で9号線を走ってですね、三朝のところへ左に曲がりましたが、極端に言うとオーストリアの田舎とあまり変わらないなど。なぜかという、やはり山の形とか高さが、日本とオーストリアでは似ているのではないかなと思います。ただ一点違うのは先ほど森下会長からお話がありましたけれども、山の手入れが全然違う。今見たらやはり日

本の山は鬱蒼としているなと思います。オーストリアの山はですね、計画的に伐採もしますし間伐もしますから、山がすごくすっきりしているという感じがします。初めは「ゴルフ場かな」とか「スキー場かな」と思ったのですが、そこは木を切ったあとが緑の丘陵になっていまして、そこに牛とか羊がのんびりと草を食べていると。見た感じは、山の形とかそういう眺めは似ているのですが、やはり身近な里山と言えるところの手入れがずいぶん違うなと思います。また、オーストリアでは家がぼつんぼつんと山の中腹に見えるのですが、三朝の山の途中で家が建っているなんてところはないなと思いました。

林業が盛んな北欧フィンランドとかニュージーランドに行きますと、平地に木が生えているわけですね。まるで野菜を植えてあるように木が生えているわけですから、これだったら非常に効率的な林業が可能だろうなと思ったわけですが、オーストリアは日本と同じように非常に山が急峻なところもあるのにかなり大型機械が入っていて効率的な生産が行われている。そういう意味で今後日本の林業を考えるうえでも参考になるのではないかと思います。聞きかじりですが、オーストリアの人たちが日本に比べると岩盤が硬いので大型機械が入れやすいというお話をされました。一方この間 CLT（直交集成材 Cross Laminated Timber）の協会の方々にお聞きしましたら、日本の山でも結構硬いから大型機械の導入は可能だというお話をされていました。そういうところはぜひ専門家の方にお伺いしたいと思います。

似ているといえば地形だけではなく人間も似ているという感じがいたします。オーストリアは非常に親日的な国ですが、思っていることをすぐ言わないという意味で日本と似ているかもしれません。ある時、私の知人が親しそうに話をしているので「どういう方ですか」と後で聞いたら「あの人には注意しなくちゃいけない」というのです。表面的には親しげに付き合っているのですが、腹では全然別のことを考えている。京都でそういうことをよく言われますけれど、文化が進んだところというのは似ているのかなという感じもいたします。ある人によるとオーストリア人というのは「ドイツ語を話すイタリア人」だというような言い方をされます。どういうことかという地理的にもドイツが北にあってイタリアが南にある。その間にオーストリアがあるということですが、ドイツのように四角四面でがちがちでということではないがイタリアの人ほど、イタリアの人が聞いたら怒るか笑うかわかりませんが、いい加減ではないと。なぜそういうことが大事かという、法律とか規則をつくりませんが、それをどう運用するかというのは非常に大事なことだと思います。ドイツは法律に書いてあることは書いてあるとおりにやらなくてはいけないという傾向がありますが、オーストリアの人たちは法律は法律だけれど柔軟に運用するというような意味で日本と似ているところがある。林業について技術だけでなく制度というものをどう使っていくかということが大事で、オーストリアは日本と似ているという意味で勉強する価値があるところではないかと思います。

さっき山の話をしましたけど、もう一つ日本とオーストリアで違うなと思ったのは、日本はどこに行っても家が多すぎると。今「地方消滅」だとかみんなが言っている最中にお前なんていうことを言うのだと仰るかもしれませんけども、オーストリアとかスイスの山村

地帯を見ると山村は山村で非常にきれいに手入れされた景観が保たれていて、日本のように家が一杯建っているというようなことがないような気がします。ただ昨年夏休みにスイスの山に行きましたらたくさん家が建っているのでびっくりしました。自分の思っているスイスのイメージと全く違って、こんなことならオーストリアに居た方がよかったと思うくらいスイスは家が建っていました。それはなぜかというとは実は別荘とか投資で家を建てている人がたくさんいるということのようです。住んではいけないけれどいい場所だということで家をどんどん建てる。とうとうスイスもこれはいけないということで、州の法律で住んでいない人の家は例えば一定の割合ですね、20 パーセント以内にするとか、そういう規制をしないとスイスの景観が台無しになってしまうということで、やはりゆったりした景観は観光政策としても大事だということです。オーストリアの林業の政策の中でもやはり山の持つ景観の美しさ、それをどうやって維持していくかということが非常に大事なことになっているのではないかと思います。家が多すぎるという意味でついでに申し上げますと、昔熊本県の知事をやった細川さんが過疎、過疎というけれど、日本の過疎というのは「適疎」、適当、適切な密度の疎らさという意味で適疎という言葉を使っておられました。私が子供のころは日本の人口が9千万人でしたけれども、それから20年~30年で3千万人人口が増えて1億2千万人になったわけです。この3千万というのは実はカナダの国全体の人口と同じ規模の人口が20年~30年で増えて、それが大都市に集中したわけですから日本の景観というのががちゃがちゃになってしまったのも仕方がないと思います。今、人口減少が大変大きな問題になっています。確かに年金とか社会福祉政策の面では大きな問題ですけど、私は気持ちのいいところに住みたいという我々のそういう願望を満たすという意味では私はもう少し人口が減ったっていいと。私の子どもの頃の9千万人、あと3千万くらい減ったっていいと。ただ減り始めると止まらないという問題がありますから、少子化対策には今手を打たなければいけませんけれども、やはりもう少しゆったりみんなが住めるような日本の国土というものをつくっていかねばいけません。そういう意味で励ます意味で申し上げるのですけれども、鳥取県のことを私ほうらやましいとすら思うのですよ。信じられないかもしれませんが、明治5年の統計によりますと鳥取県って40万だったのです。当時の日本の人口は3千万なのです(注:鳥取県39万人、全国3300万人)。それが全国では4倍に人口が増えて1億2千万になったのです。ところが鳥取県は40万が60万になった。たった1.5倍です。全体が4倍伸びて鳥取が1.5倍になった。これだけ見ると非常に寂しい気持ちになるかもしれません。ただですね、ある意味では低空飛行ですよ、飛行機が飛ぼうと思ったら上がらなかったということは墜落もしないということですから、どんなに世の中が大変だと言っても元々40万くらいはこの鳥取県で養っていけるわけですから、私は例えば林業とか観光とかいろいろな手を打てば地方創生なんかは鳥取県の場合は大変な問題ではないと、まあ強がりをちょっと言ってみたいと思うわけです。

そろそろ本論ということで、オーストリアの林業ということをお話したいと思いますが、私もこの講演会に出なくてはいけないということで、日本からの視察団の後を追うように急いで製材所とか林業の現場とか林業の研修所、そういう所に行ってきました。私は日本

のことをまったく知りませんので、後ほどのパネルディスカッションなどで日本もこういうことやっているよとか色々教えていただきまして、またオーストリアに帰りましたら勉強を続けたいと思います。

実は昨日石破大臣のところに行って参りました。大臣は地方創生のご担当ということで林業に大変強い関心を持っておられます。それから赤澤先生も国土交通省の出身ではありますが非常に農林漁業に熱心に取り組んでおられます。それだけ鳥取県というところがそういう政策を求めているのだということだと思います。ちょっと脱線してすみませんけれども、笹川堯先生という大変な石破先生の応援団の先生がおられまして、少し前の政治資金パーティーで「大体みなさん、鳥取県のように人口の少ないところは木の一本一本に投票権を与えないと地域振興なんかできない」と言ってみんなを笑わせられたわけです。それだから石破大臣も林業について熱心に勉強されているというわけではないと思いますけれども、昨日大臣の部屋で二つ申し上げたことがございました。一つは山を活かすことによって地域の中で回るお金を増やす、ここが一番大事なところですが、ただ、だからと言って林業だけで地方創生ができるわけではないこと、二つ目は林業の問題は今まで手が付けられていなかっただけに、やれば効果は目に見えるくらい大きいこと、オーストリアもたかだか最近 20 年くらいの話で決して手遅れなどということはないこと。我が国はエネルギーのほとんどを石油とか天然ガスとか輸入に頼っているわけです。今は円安で、さらに原発がみんな止まっていますから、原油などの輸入代金だけで 3 兆円も赤字が増えているわけです。この輸入エネルギーを全部山で代替するということはもちろんできません。できませんけれども、地域、地域の努力、これはまさにオーストリアで実験して成功していることですが、地域、地域の小さな単位でうまく木材を使うということができれば、外の産油国に払っている石油代金の一部を払わないで中で使うことができる。収入は 100 で一緒ですけどもそのうちの 20 を外国に払っていた、その 20 を外国に払わないで中で使う。私は林業の専門家ではありませんけれども、政策ということはずっとやってきましたので、何が一番根っこで大事なのかなと考えたら、自分たちが地域の外に払っているお金を中で使おう、これが本当の内需振興策になります。それから政策を議論するときにみんなが陥りやすいのは、「こっちだ」というとみんながそっちを向きます。例えば林業だというとみんなが林業でいくかといえ、そうはいかないのです。だから例えば鳥取で 23 万世帯が年間 20 万円光熱費として外にお金を払っていると考えたら、そのうちどれだけを地域に還元することができるかという話になる。年間 460 億の光熱費のうち 1 割が木材によって肩代わりできるとなると 50 億近いお金が手元に戻ることになる。3 割なら 140 億。それは補助金でも何でもなく、自分の稼いだお金を自分の県内で使うという循環を生み出すことができる。政策を考えるときに大事なものはスケール感で、いくら自分たちで使えるかということが計算できると、そのお金でどれだけのことができるか、そんなにたくさん色々なことが全部できるわけではないけれども、どれだけのことができるかということが計算できる。

オーストリアの南部にギュッシングという 4 千人の小さな町があります。この町は東西

冷戦の時にはハンガリーとの国境の近くで「東西の壁」があり行き来ができなかった。実はオーストリアの中では昔の旧共産圏に向かう道路というのは必要なかったので十分整備されていません。ウィーンの周辺でも今高速道路を延伸していますけれども、それはハンガリーに行く方とかチェコに行く方とか、そういう昔用がなかったところの高速道路を整備しているのですが、ギュッシングという町も東の辺境みたいなところですからまったくある意味で取り残されていて、道路等インフラの投資はまったくない、産業はゼロ、失業率は高い、地域に職がありませんから70パーセントの人が外に働きに出る。外に働きに出ているうちにそのまま引っ越してしまう。社会減でどんどん人が出て行ってしまう。大学もない。頼みの農業も非常に小さくて生計の足しにならない。そこで気が付いたわけですが、何もない、吉幾三の「おら東京さ、いくだ」という歌の「電気もガスも電話もねえ、映画も集いも何もねえ」みたいに何にもないところだけれど、見回してみたら木があった、4千haの山がある。この木を使って何とかならないかというのが切羽詰まった話だったのです。高い理想で環境にやさしいとかというのではなく、自分たちでこの木を何とか使わなくちゃいけないというので始まりました。そこでまず最初は熱供給をするのです。オーストリアというところは基本的には寒いところで5月になるまで野菜の苗を植えられない、霜が降って植えた苗がだめになるのです。8月になると、もう寒くなるということで、実は今年もギュッシングの近くでは6月の末に雪が降りました。ということで常に熱に対する需要というのがあるのです。ここも日本での木材の利用を考えるときに重要なことなのですが、熱の需要があるかどうか。需要がないところに色々なプラントをつくればそれは赤字になるだけですから、熱の需要をどう考えるかということがあります。それからギュッシングでは熱供給の基本的なベースの上にコージェネレーションということで電気をおこすことにしました。それからさらにそこから合成的な燃料をつくるか合成ガスをつくるということで、エネルギー事業としては自給率100パーセント以上で周囲の市町村に電気やガスを売っているということで、豊かな町になりました。それから電力が安くて安定しているということで50社くらい企業が新規に立地して1,100人の雇用が生まれた。もともと小さな町ですから、これは大変な効果があったと思います。

ということで、こういうことを一つのモデルにして話を進めようという話になるのですが、一つ注意しなければならないのがギュッシングでは切羽詰まって何とかしなくてはということでやりました。ただ、周辺の人たちが真似し始めると外に電気を売ることができなくなりますから、ある意味では早い者勝ちという面があると思います。それから木材というのはなんといっても輸送コストがかかるのです。したがって地産地消と言いますが、木材こそ地産地消にふさわしい。遠くから運べば運ぶほど運搬費がかかって採算が合わなくなる。実は再生エネルギーで木材の利用が増えたために木材の輸入も増えています。輸入といっても、地図を見ていただくとウィーンというのは右端の方なのです。北がチェコ、東がスロバキア、ハンガリーと接していますからウィーンの周辺の木材を利用しようと思えば当然国境を越えて外国になる。昔はオーストリア・ハンガリー帝国という一つの帝国であったわけですがけれども、ウィーンの周辺でそういうことが盛んになると当然輸入が必

然的に増える。トラックが運んでくる、輸送費を考えればどうしても外国から買うことになる。うまくいきすぎて悲鳴を上げるということはよくあることなのですが、結局木材の需要がどんどん増えて、国内材の値段は必ずしも上がっているわけではないのですが、輸入が増えるということで木材の取り合いになっています。特に政府が再生エネルギーということで木材をエネルギーの源として使おうということになったために、もともと木材の利用が非常に盛んなところに上乘せされたものですから、パルプ業界が輸入を増やさなくてはいけなくなったようです。パルプ業界に言わせるとエネルギーというのは結局燃やすことですから、せつかく紙が作れるのに再生エネルギーの補助金のせいで無駄に燃やしているというようなレポートも発表したりしています。山の利用は進めなければいけないが、供給量には限りがありますから、オーストリアはそういう木の取り合いになるくらいに利用が進んできているということではないかと思います。

それではスライドを用意してありますので、これにそって少しご説明したいと思います。

(1 ページ) 8割が民有林で2割の18%が国公有林ということです。それから林業家の所有面積は5h a未満が16%、5~50h aが70%、50h a以上が14%。林業というのは成り立つためにどれくらいのh aがいるか、オーストリアの人から聞くと小規模な農家の兼業によってこの林業というのは成り立っているということです。毎年の伐採量は生育量の85%で、ここは非常に国としても大事なところだと思いますけれども、きちんと管理をしている。日本の場合だと20~30%で、もっと利用しようということです。切りすぎるという心配を今の段階でする必要はありませんけれども伐採量を生育量の85%に管理し、さらに最近温暖化で今まで木が育たなかった山の上にも育つので、森林面積が増えているという話も聞きました。木の種類は針葉樹が72%で大半がトウヒ(スプルース)ということです。ある製材工場、CLTの工場に行って色々お話をしたのですが、日本向けにも10%くらい輸出していると言っていました。向こうの木は針葉樹で非常に密度が高くて硬いと言われておりまして、日本は杉とかやわらかい木が多いというので、そこでオーストリアの企業もCLTを丸ごと輸出しようとは考えていないのです。むしろ日本の企業と組んでうまく商売できないかと。例えばやわらかい杉を中に入れて、硬いホワイトボードを外に組み合わせるとか。逆に日本の目のたった美しい木材を外にしようというようなことも考えられると言っていました。それから大型トレーラーで物が運搬できますから、CLTが一番長いので16mのものをつくっています。日本ですと真庭の銘建では今6mでもう少し長いをつくるのだという話もされていましたが、そういう規格も含めて、色々な協力ができるのではないかという話でございます。

(2 ページ) 経済効果ですけれどもGDPに占める林業の割合自体は0.4%と非常に低いですが、林業と製材等々関連産業を含めると、就業人口の7%に相当する30万人が就業している。基本的にオーストリアは木材・木材製品は伝統的に黒字で観光業とともに輸出産業です。ただ先ほど申しましたように政府が再生エネルギーということで木材の利用を推進していますから、最近木材だけを見ると赤字になっています。

(3 ページ) 林業の役割ということで、景観、地域振興、二酸化炭素の削減効果、土砂崩れ

雪崩の防止効果、湧水の浄水効果、環境にやさしいエネルギー源、日本でもよく言われている効果ですが、これを支えるために政府が支援しているということです。

(4 ページ) オーストリアでは再生可能エネルギー促進ということで、少し原発の話とも絡めてお話をしたいと思います。オーストリアでは原発が法律で禁止されており、政府は代替手段として再生可能エネルギーを促進しています。オーストリアは実は原発を一つつくったのです。つくった後、それを稼働するかどうかのときに国民投票をして決めようということで、1978年に国民投票が行われました。その国民投票にかけたのは社民党の非常に有力な首相で自信満々で「国民は私の政策を支持してくれるはずだ」と国民投票にかけたなら、なんと 49.5 対 50.5 で負けたのです。反対した人の中には別に原発には反対ではないけれど首相が「自分はこの国民投票に負けたら辞める」と言ったものですから、それだったら辞めさせてやろうではないかと言って反対に入れた人も結構いたと解説してくれる政治家がおりました。ということでぎりぎりその原発は稼働されないことになりました。ただ面白いのは今でもその原発の中に入ることができます。転んでもただでは起きないというのはこのことで、その稼働しなかった原発の一つは観光に使われているのです。中まで入って見られる原発というのは世界中にここしかありませんから、原発というのはどういうものか分かるというので観光になっている。もう一つは研修に使う。自分たちは原発は絶対反対と言っておきながら、他の国の原子力技術者研修にはちゃっかり使っている。いずれにせよこのようにぎりぎりの投票で決着がついたのに、今や右から左まで原発は反対。日本とオーストリアの間にはほとんど意見の違う分野はないのですが、反原発、海がないのに反捕鯨、それから反死刑、これらは一つの宗教のようになっています。そして他の国にも原発をつくらせまいと一生懸命。一つは国民投票の後にチェルノブイリの事故がおきまして、先ほどの地図で真ん中あたりのザルツブルグのへんはかなり高濃度に汚染されたという経験があります。実はオーストリア自身には原発はないのですがその周りには結構たくさん原発がありまして、そういうことから何とか原発をやめさせようとしている。この間もイギリスとの間で大喧嘩になったのが、イギリスが新しい原発に 200~300 億円近く EU 補助金の中から原発に補助すると決めたところ、それに猛然とオーストリアが噛みついて、EU の補助金を原発に使うのは違法だと。再生エネルギーに補助金を使うのは良い、しかし補助金を原発に使うのは絶対反対だということで今裁判沙汰になっています。イギリスにしてみれば余計なおせっかいだということで、リークされた情報が新聞に大きく出たのですが「お前のことなんか徹底的にいじめてやるから」と毒づかれたというようなことが暴かれておりました。いずれにせよ反原発ということで再生エネルギーを一生懸命やらざるを得ない。それからロシアから天然ガスを 60% 輸入しています。ロシアはご承知のようにウクライナの問題とか常に不安定な要素を持っておりますので、なるべくロシアのガスへの依存度を下げようということからもこの再生エネルギーに力を入れている。ただこの円グラフをよくご覧いただきますと、山の国ですから水力で 11.1%、それから再生エネルギーのもう一つがバイオ燃料というのが右側にありますけれどこれが 13.1%、それから左側に廃材・可燃ごみ 6.3%とあります。木質バイオマスというのはバイオ燃料の方に分類さ

れています。水力、バイオ燃料、廃材・可燃ごみなどで全体のエネルギーの 32.3%を賄える。日本も、私が子供のころは水力発電が非常に盛んでしたけれど、今はそうはいきません。ある意味オーストリアは非常に恵まれた国で、水力があるというのと木が豊富だということで原発なしでもできるからこのような原発についてかなり強い態度に出る。ドイツのメルケル首相も福島事故のあと反原発だと言いましたが、実はフランスからたくさん輸入しています。フランスは原発でたくさん発電しているわけですから、ドイツは反原発と言いながら実はフランスから原発の電気を買っている。オーストリアはその電気が原発でできたものではないという証明をつけると無理難題を言いついて、電源に色は着けられないですからそんなことはできないだろうという話をみんな言うわけですが、オーストリアはそういう法律もつくっていることをご紹介します。

(5 ページ) 再生エネルギーの割合が 32.3%というのは今申し上げましたが、注目すべきは 3 番目の点にあります木材の生産量が過去 10 年間に 48%増加しているが、このうち木質バイオマスの生産量は 98%増加。この木質バイオマスというのは木質チップ、ペレット、薪、ブリケット（ペレットよりも大きい人工の薪）などがほぼ 2 倍に増えているということ。

(6 ページ) 次をご覧くださいと思いますが、課題と書いてあります。発電量の不安定性ということで、水力発電はもちろん雨に左右されます。それから木質バイオマス、これで電力をやろうとすると日本と同じで補助金を出してこれを支えているということです。それから木材の輸入増加ということです。ただ木材の値段が上がってくると、自治体が地域の暖房、発電を自分で事業としてやって赤字になって困っているという例もありますので、やっているところがすべてうまくいっているというわけでもないということにご注意いただいた方がよろしいかと思います。

「里山資本主義」の本をはじめ読んだ時、林業が活性化したことによって若者が戻ってきていると、だからこれが地方再生の決め手だというような印象を持ったわけですが、丁寧に読むと実はそこまでは書いてありませんでした。

ここでオーストリアの林業でどれだけ収入があるかということの一つご紹介させていただきたいと思います。大体の数字を申し上げますけれども、サラリーマンと自営業 2 つに大きく分けると、サラリーマンの年収は大体 350 万円、自営業をやっている人の年収は大体 490 万円というのが 2013 年のデータにあります。サラリーマンということと言いますと建設業が 450 万、一方農林業はどうかと、これは経営者ではない雇われている人ということになりますとこれは 220 万です。ファーストフードで働くのとほぼ同じ年収だということで、雇われて働くときにはそれほどの収入は実は農林業ではない。一方自営業の切り口で見ますと、農林業の自営業は 300 万です。林業についてどうかというと、林業自体は 300 万程度なのですが、実は林業をやっている人というのは小規模な山持ちが多く、農業と一緒にやっている。農業と林業をやっている農業の方には EU などから補助金がどんと出ます。これは推定ですが収入の 33%が補助金で、その他副収入が 20%ということで、副収入を含めた林業というのは 630 万ということで自営業の平均より 140 万余多い。これだけ



の収入があればもちろん若者も戻ってくる。

それから林業の研修所にも行きました。行きましたところ女性も3分の1か、半分近くが若い女性。恰好いい作業服で「これでディスコに行くんだ」という話もしていましたが、林業が危険で収入が低いというイメージから、恰好がよくて安全な仕事と変わってきている。研修所でいくつか実験を見せてもらったのですが、チェーンソーはやはり死亡事故やけが人が多いということで、どうやるとチェーンソーが跳ねて危険なのかという実験を見せてもらいました。それから倒木というのが非常に危険だということでした。オーストリアは雪も多いし風も強く倒木が大変多い。さっき年間生育量の85%で収まっていると言いましたが、実はこの何年かを見ると倒木が非常に多かったのです。育った木の量よりも切った木の方が多かったのです。それだけ倒木が多いのですが、倒木には倒れるときに変な力がかかっているのです。チェーンソーをあてる場所が悪いと非常に危険だということ、自営業で林業をやっている方は自分ではやらないそうです。倒木を切ってくれる専門の業者がいて、間伐とかそういうものは自分たちでやるけれど、倒木の処理なんてそんな危ないことは専門の人に頼むということ、個人と専門業者の役割分担もできているのかなと思いました。

それからチェーンソーで自分の足を切ったりするという事故も多いということで防護服を見せてもらいました。外見は普通の服なのですが、中に鉄でも入っているかと思ったら、中に繊維が何重にも入っていて、チェーンソーがあたると繊維が鋸の刃に絡み付いて刃が止まるという実験を見せてもらいまして、若い人に働いてもらうためにはそういう安全対策というものを講じなくてはいけないのだなということをおぼろげに学びました。

最後ですけれども、再生エネルギーにもっと木材を使ってもらうためには木クズ、鋸クズが必要です。林業が盛んになるためには、根っこになる木材の需要を増やしていく必要があると思います。一つはエネルギーですけれども、もう一つはやはり木造住宅ではないかと思います。私も都市計画の仕事長くやっていましたが、実はまちづくりやっている人は「木造は敵」くらいにかつては思っていました。なぜかというと関東大震災で10万以上の人が亡くなったのは火事のせいです。地震で家が倒れて下敷きになったというよりは火事で亡くなった。それから戦争のときに焼夷弾で焼け野原になったのは、日本の家が木と紙でできていたせいで、江戸時代から戦争中もそうですが火事をどうやって防ぐかということが都市計画の中では大事だったのです。ですからなるべく木造の密集地帯というのは再開発して燃えない耐火の建物を建てていこうというのが大きな動きだった。ただ国土交通省の基準でも耐火というのは何かというと、逃げる時間を確保するというのです。木は表面から燃えていきますから1時間に何ミリ燃えるとか何時間持つということが計算できるのです。鉄骨の場合にはむしろ熱にあぶられてぐにやっとなって一気に崩れ落ちるといふこともあるので、木造の方がむしろ計算ができるというメリットがあるということで、そういう基準にオーストリアでは改正がなされています。ただオーストリアもつい最近まで政府が木造には冷たかったと聞いて驚きました。オーストリアのように林業が盛んな国で木造に冷たかったというのはどういうことかなと思いましたら、例えばエレベ

ーターの周りのダクト、火の通り道になるところはコンクリート、製材所の本社は全部木造でできていますが昔の基準に基づきエレベーターの周りはコンクリートで固めてある。そこも今は 6 時間持つような木造構造物が可能になるということで基準が緩んだ。またウィーンでは 24 階建の木造の建物が建とうとしています。日本では城崎の温泉街のように昔は 3 階建ても珍しくなかったようですが、戦後長い間都市部では禁止され、それが今では一定の基準を満たせば木造 3 階建てはかなり建てられるようになりました。ただそれより高い建物になると日本は地震国ですから耐震、耐火基準をどうするか。オーストリアの会社が日本の筑波の研究所で耐震の実験をやっているそうです。それから耐火という問題では実は一つ一つの家では個人が逃げる時間を稼ぐ耐火性というのがあるのですが、日本のように家が密集しているところでは火が延焼するということがありますから、こういうところも慎重に検討する必要があると思いますけれども、今までのように木造は頭からダメだということではないということに方針が変わっていかなければいけない。したがって 2020 年の東京オリンピック、パラリンピックの選手村ではいくつか木造の CLT 宿舎が建ててもいいのではないかというふうに思うわけですが、そういう一つの大きなうねりというのをつくっていくことが大事ではないかと思います。

最後になりますが、外務省の方針として、地方との連携交流というものを深めようとしています。やり方としては単なる姉妹都市の交流というのではなくても、都市計画をテーマに、それから林業をテーマにしてということも一つのやり方ではないかと思います。今日本とオーストリアの姉妹都市は 28 ありますけれども、ぜひクラーゲンフルトのあるケルンテン州、一番南の非常に林業の盛んなところがオーストリアの 9 ある州の中でまだ日本のどことも姉妹関係のない州ですので、ぜひ鳥取県とですね、県と市町村一緒になってでもいいと思います、別に今までのような姉妹都市交流ではなくても林業をテーマにしたような交流というようなことをぜひ皆さん方で知恵を絞ってやっていただけたらいいなと思います。今後の予定としては、那須塩原市とリンツ市が姉妹都市を結びます。実は姉妹都市を結ぶ前に子供たちの交流というのが十年以上続いております。このリンツに青木周蔵という日本の明治時代の外務大臣をやった人の子孫が住んでいます。その人は昔の伯爵様なのですが、こういう人が熱心に子供たちのレベルでの交流を進めておられますので、鳥取県も日本の中での林間学校による交流だけではなくぜひオーストリアとの関係も築いていっていただければと思います。

ご静聴いただき、どうもありがとうございました。

(本稿は当日の基調講演に加筆修正したものである。)